

巻頭言 はじめに 会長 二神 俊一 2

特集：小さな発見

常民文化研究講座	編集部	2
二神島と河東碧梧桐	編集部	8
平田玉圃と二神家・黒瀬家	編集部	14

会員さんからの投稿

二神寛治と南湖院	齊藤 文嗣	19
----------	-------	----

役員をつぶやき

老人会	二神 守	35
令和になり昭和・平成二世代前のこと	二神 久蔵	36
なんとか存続している港山二神氏	二神 康郎	38
宏介さんの2019年を振り返って	二神 宏介	40
樅の巨木	二神 俊一	43
北海道からの訪問者	豊田 渉	46

# 常民文化研究講座

編集部

## 第21回常民文化研究講座が松山市内で開かれる

### 250人参加、離席少なく4時間半

平成29年(2017)12月9日(土)13時から松山市道後公園内にある「松山市立子規記念博物館で「第21回常民研文化研究講座」が開催されました。主催は神奈川大学日本常民文化研究所、特別協力は二神系譜研究会、後援は愛媛県教育委員会・松山市・松山市教育委員会・愛媛新聞社でした。

途中休憩をはさみながら予定された17時30分までの4時間30分。長丁場にもかかわらず離席する方も少なく約250人(主催者発表)が、プログラムに沿って各研究員や講師の報告を傾聴しました。

### ■愛媛新聞による講座の告知

なお、開催2日前の愛媛新聞(12月7日付け)で、次のように紹介されました。

「松山沖の二神島をテーマにした21回常民文化研究講座『二神島 その歴史と民俗を訪ねて』(神奈川大学日本常民文化研究所主催)9日午後1時から松山市道後公園の子規記念博物館で開かれる。研究所が長年進めてきた歴史・民俗調査の成果を紹介するとともに、現在の地域調査が抱える課題や可能性などを話し合う。前半の調査報告では、同研究所の田上所長や前田禎彦研究員ら5人が、二神島調査のこれまでの経緯を踏まえ、中世から現代にわたる水軍や墓石、供養など多角的なテーマで発表する。後半のパネルディスカッション「二神島調査の意義と展望」では愛媛大学の石野弥栄非常勤講師、二神系譜研究会の二神英臣事務局長、豊田渉常任理事がパネリストとして参加。日本常民文化研究所の津田良樹客員研究員が司会を務める。参加無料。問い合わせは神奈川大学日本常民文化

研究所＝電話 0 4 5 ( 4 8 1 ) 5 6 6 1」

## ■二神俊一会長の挨拶

講座の最後には、俊一会長がお礼の挨拶をいたしました。その要旨を紹介します。

ご紹介いただきました、二神系譜研究会の会長二神俊一でございます。本日は神奈川大学日本常民文化研究所主催の第 21 回常民文化研究講座「二神島 その歴史と民俗を訪ねて」のシンポジウムに、このように大勢お集まりいただきまことにありがとうございます。

私ども二神系譜研究会は今回、「特別協力」という立場で開催に協力させていただきました。当会が組織的にスタートしたのは、平成 12 年 (2000)3 月ですからもう 17 年経ちましたが、先ほど田上所長のご報告にございましたように、平成 7 年 (1995)8 月の「二神島シンポジウム」で神奈川大学の網野善彦先生がご講演をされたのがきっかけでございます。「二神島の調査から見えてきたもの」と題して、島の百姓は海の民、海の領主としての二神氏などの新たな歴史観をお聞きしたことが今でも強烈に印象に残っています。

当会は、二神の名字を名乗る人たちやその関係者をはじめ中世伊予の国・地域の歴史に関心のある方々の集まりで、単なるルーツ探しではなく二神島から全国に展開していった二神氏の系譜を科学的に調査・研究をしていく会でございます。活動の目的は、二神氏の系譜を調査研究するとともに、他の系譜・研究組織・歴史に関心のある方々との交流を図り、活動を通じて地域の活性化を推進していくことを目指しています。

しかし、私たちは素人の集まりでございまして、不十分などころが多いのですが、神奈川大学日本常民文化研究所が長年に亘り地道な調査を行い、二神島と二神氏の総合調査研究の集大成が本日の集まりとなったわけでございます。これは二神島および二神氏にとって、また愛媛県・松山市にとっても大きい財産であると思えます。



第21回 常民文化研究講座

二神島調査と神奈川大学日本常民文化研究所

# 二神島

その歴史と民俗を訪ねて

■ 調査報告

- |                        |                    |
|------------------------|--------------------|
| 二神島調査の経緯と新たな歴史発見       | 田上 繁 (日本常民文化研究所所長) |
| 中世二神氏と二神島              | 前田積彦 (日本常民文化研究所所長) |
| 二神権章の歴史意識—「水軍の記憶」をめぐり— | 関口博巨 (日本常民文化研究所所長) |
| 二神島の墓石と供養              | 高井良大 (日本常民文化研究所所長) |
| 和船と洋式船—二神島豊田造船所の記録から—  | 民 政明 (日本常民文化研究所所長) |

■ パネルディスカッション：二神島調査の意義と展望

- 石野赤栄 (京都大学非常勤講師)  
 二神英臣 (二神系譜研究会事務局長)  
 豊田 渉 (二神系譜研究会業務局長)  
 司会 / 津田良樹 (日本常民文化研究所所長)



二神島調査報告書「二神の経緯」を展示する。



2017年12月9日(土) 13:00-17:30  
(受付開始 12:30より)  
 会場 / 松山市立子規記念博物館 4階講堂

(〒790-0857 愛媛県松山市建通公園1-30) Tel. 089-431-5566  
 JR松山駅より市内電車にて渡津沼原駅または湯城公園前駅下車徒歩5分(所要約20分)  
 松山空港より道後温泉行きバスにて(所要約35分)  
 子規記念博物館公式サイト [http://tekihahon.hesp.or.jp/site\\_info/access.php](http://tekihahon.hesp.or.jp/site_info/access.php)

事前申し込み不要  
当日は事前申し込み無しでもOK

参加  
無料

主 催：神奈川大学日本常民文化研究所  
 特別協力：二神系譜研究会  
 後 援：愛媛県教育委員会、愛媛新聞社、松山市 / 松山市教育委員会

# 二神島調査と神奈川大学日本常民文化研究所

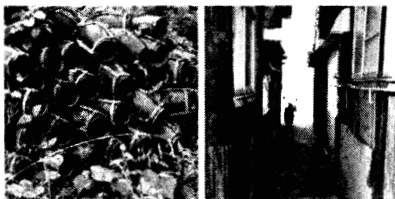
## 二神島 その歴史と民俗を訪ねて

### 開催趣旨

二神島は愛媛県・忽那諸島に属する小さな島です。1972年には国際的な地理雑誌「ナショナル・ジオグラフィック」5月号に、「日本の村に暮らす」と題して26ページにもわたって紹介されたこともあります。

そのような二神島において、神奈川大学日本常民文化研究所が長年にわたって進めてきた歴史・民俗調査の成果報告書が、現在次々と刊行されつつあります。

本講座は、そのエッセンスを地元松山の方々に知っていただくために松山市で開催することになりました。調査の経緯を振り返り、その成果を紹介するとともに、長年の現地調査でご協力下さった方々にも加わっていただき、現在の地域調査が抱える問題点や可能性についても話し合っておきたいと思っております。



### 講師プロフィール

- 田上 繁**：1947年福岡県北九州市生まれ。神奈川大学経済学部教授、日本常民文化研究所所長。専門は日本近世史。編著に『二神島朝宗文庫目録』1～4、『島の写真集 二神島写真資料集』1～6、論文に『越前内海二神島の近世的対応に関する試論』、『鎌倉瀬戸内海の歴史民俗』等がある。
- 前田桃彦**：1982年富山県生まれ。神奈川大学外国語学部教授、日本常民文化研究所所長。専門は日本古代史。編著に『二神島朝宗文庫 中世文書・系図編』、論文に『古代の裁判と秩序』（『宮城講座 日本歴史』5）等がある。
- 関口輝臣**：1960年徳島県生まれ。日本常民文化研究所常務研究員。専門は日本近世史。著書に『江戸の村と身分 第2巻 村の身分と田租』（共著）、『近世の開港と環遊』（共著）、論文に『伊予二神島の近世―瀬戸内海における「島村」の形成』（『瀬戸内海の歴史民俗』）等がある。
- 黄井良大**：1972年愛媛県松山市生まれ。日本常民文化研究所常務研究員。国史、カルチュラル・スタディーズ（松山教室）『古文書解説』講師。専門は日本近世史。論文に『中也二神島の神話』（『論集瀬戸内海の歴史民俗』）等がある。
- 昆 政明**：1965年香川県千宗田市生まれ。愛媛県立愛媛上郷に勤務。その後神奈川大学外国語学部教授、日本常民文化研究所所長。専門は民俗学・美術史。論文に『瀬内地区に見る舟子船の歴史』（『歴史と民俗』52）、『「種」の操作と絵巻表現』（『モノノミ 藤原一民具・物質文化からみる人類文化』）等がある。
- 石野弥栄**：1944年愛媛県高岡市生まれ。愛媛県歴史文化博物館常務学芸員、愛媛県立湯谷資料館館長、愛媛大学一環宮次中法部助教授を歴任。現在愛媛大学非常勤講師。専門は日本中世史。特に四国地域の中世史を研究。『中世河野氏権力の形成と展開』等著書・論文多数。
- 二神英臣**：1945年愛媛県松山市生まれ。関西国史学会41年間のうちの、愛媛支部顧問（5年間）、活動（2005年より5年間愛媛県東北歴史博物館専員を務める。2000年二神系調査研究会設立に参加し、理事長職務を務める。
- 豊田 渉**：1965年愛媛県二神島生まれ。愛媛県立松山工業高校を卒業後、島にUターンし宇島町役所（当時）に入り、自分の島・地域を知るためには島の島を見なければという思いで、愛媛県朝倉青年協議会全国総会青年会議等に参加。1978年5月から8年間に『島の新聞まもり』を発行する等、島の歴史・文化などの調査も手がける。2000年3月の二神系調査研究会設立に参加し常務理事を務める。

### お問い合わせ

## 神奈川大学日本常民文化研究所

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1  
 TEL : 045-481-5661 内線 4358 Fax : 045-413-4151  
 メール : jomin-kouza21@kanagawa-u.ac.jp

今後は、残されたものや未発見の史資料をどのように調査して後世に伝えていくか、その活動を通じて地域の歴史文化の継承や活性化にどう生かしていくかが問われようとしています。神奈川大学の創始者が愛媛県内子町出身の米田吉盛氏であったことも大きい縁でございまして、今後とも日本常民文化研究所のご支援を賜りたいと切に望んでおります。最後になりましたが、皆様のご健康と末永いご発展を祈念いたしております。

## ■ 講座終了後の報道「愛媛新聞」から

第 21 回常民文化研究講座の内容は 12 月 27 日付けの愛媛新聞で紹介されました。前田禎彦教授の報告内容を中心に分析・解説しながら今後の課題についても提議する形で締めくくっています。

前田禎彦氏講演の要旨は次のとおりです。

二神氏は長門国豊田郡の郡司を務め、豊田を名字とした藤原氏の末えいと伝えられている。豊田氏は鎌倉時代の長門国では大内氏などと並ぶ有力御家人だった。一部が伊予国の二神島に渡って二神氏を名乗るようになったのは、鎌倉時代末期から南北朝期にかけて。江戸初期の伝承では一族の相続争いに敗れて逃げてきたのがはじまりという。

伊予を支配していた河野氏の家臣として二神氏が姿を現すのは河野家の家譜「予章記」では南北朝期の 1367 年、片山二神家文書の「二神氏系図伝書略記」によると、二神氏は南北朝期に風早郡（松山市北条地区）に所領を賜り本拠を宅並城に移したとされる。河野家の湯築城の北方、北条粟井にある標高約 200m の宅並山に築かれた山城。二神家文書では 1479 年河野通直（教通）が二神四郎左衛門尉に風早郡の粟井郷の安岡名、友兼名、宮崎分の 3 つの所領を宛がった。

これらの所領は戦国期を通して二神家が代々相続した。宅並城にとって防衛線に当たる粟井川下流域から上流域にかけて一体化した所領だった。戦国期の二神氏は宅並城と周囲の所領を拠点とし湯築

城を守る重要な役割を担っていたと考えられる。一方で二神氏は、二神島の領主であり続けた。1551年河野通直（弾正少弼）は二神兵庫助に粟井郷の所領とともに二神島の支配権を相続するとの文書を与えている。

1584年、通直から二神亀勝に新四郎の名が与えられる。新四郎は近世二神島で最初の庄屋になった人物。本島二神家の祖で系図にある家種と呼ばれる人物とみて間違いない。

1587年の河野家滅亡や1627年の加藤嘉明の（会津への）国替えなどをきっかけに、家種・種長父子の時代に二神氏は二神島に回帰。新四郎を代々名乗り、二神村庄屋としての近世二神氏の歴史が始まる。

二神氏の系譜や構成を明らかにするには、二神家文書以外の片山二神家、柳原二神家、河野家文書その他の文書を精査していく必要がある。全体として室町、戦国期の二神氏の歴史を描くにはまだ残された謎がある。

## 二神島と河東碧梧桐<sup>かわひがしへきごとう</sup>

編集部

河東碧梧桐（1873～1937）は明治時代の俳人正岡子規に師事し、高浜虚子と並んで子規門の双璧と称される。定型・季語を離れた新傾向俳句を提唱した。全国行脚をして「三千里」「続三千里」をまとめた。のち自由律、ルビつき句など句風は変遷した。その碧梧桐のルーツが実は二神島にあることが分かってきたのである。

碧梧桐の曾祖父が二神島の二神家から松山の河東家に養子に入っているのだ。少々難しくなるかもしれないが紹介してみたい。以下は、松山子規会の例会（平成29年11月19日）で豊田渉常任理事が報告したものである。（※訂正、補筆している部分あり）

### ■碧梧桐のルーツは二神島

二神島の旧庄屋二神家には室町時代から江戸時代にかけての貴重な記録が残されていた。「二神家文書」と称されるが、これらの文書類は神奈川大学日本常民文化研究所に譲渡された。同所が刊行した二神家文書の目録や二神家に残された資料で気になる記述を見つけた。それが二神島二神家と河東家との繋がりだった。結論から言うと碧梧桐のルーツは二神島にあることが、少しずつながら分かってきた。

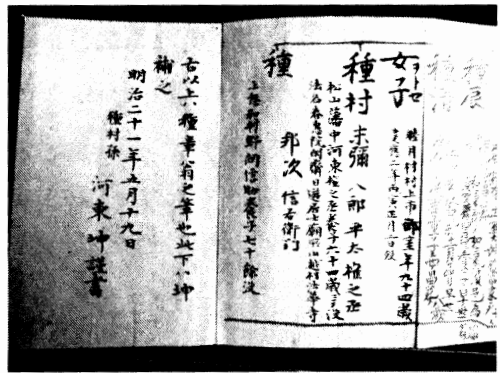
### ■二神島とは

二神島は松山の三津浜港から北西約16㎞の海上にある。島を南北から見ると同じような円錐形をした180位ほどの山が二つ望める。この二つの山の形状から頂上を神と崇め「二神（二上）」と名付けられたのではと私は思っている。東西に細長く周囲が約8㎞、面積は僅かに2平方㎞、人口100人ほどの小さな島である。島の西方は山口県に接し、周防大島は5㎞のところにある。

歴史的には、鎌倉時代後期から室町時代にかけて長門国豊田郷の



豊田氏の分かれが島に来て二神氏を名乗ったとされている。鎌倉時代末期における防州・長州には三大豪族と呼ばれた大内氏・厚東氏・豊田氏が互いに勢力を競っていたといわれる。豊田氏は平安時代に京都の藤原道隆（道長の兄）から4代目の藤原長房が長門の豊田郷に赴任し、その子輔長が初代豊田氏になったという。



二神家携帶用系図

第14代種秀に子がなく養子種世を迎えた後に実子種家が生まれた。種秀の没後に家督相続問題があり、種家が伊予の二神島に移ったとされる。二神一族は河野氏に仕えて重要な位置にあったと思われるが、河野氏の衰退などにより周辺地域に四散していった。そして、江戸幕府の崩壊とともに二神という珍しい名字を持って全国各地に活躍の場を求めていったのであろう。

## ■二神家系図及び過去帳

河東碧梧桐につながる父・静溪（せいけい）、祖父・虎臣（こしん）、曾祖父・末弥のなどを示しながら紹介したい。二神島の二神家に残る系図には二神種章の子「末弥」のところに「河東家為養子天保十一年正月十三日卒法名春恵院閑斎日遊居士」とある。

もう一つの携帯用の系図には「種村 末弥 八郎 平太 権之丞 松山藩中河東権之丞養子六十四歳ニテ没法名春恵院閑斎日遊居士廟所山越村法華寺」とある。そして末尾に「右以上八種章翁之筆也以下八坤補之 明治二十一年五月十九日 種村孫 河東 坤謹書」とある。つまり、末弥が松山の河東家に養子に入っている。

最初にこれを見たときになぜか「河東家？、俳人の河東碧梧桐と関係があるのでは」との思いがして調べることにした。末弥からの流れは次のようになる。



明治二十一年

八月三日朝 午前五時発訪二神島祖先墓、拉兒鎮、鍛、乗三名而出、  
鎮傭腕車、七時至三津、雇小舟価四十銭、発三津一時半着二神島

同四日陰夕雨在二神島、祭仙嶽翁靈及祖先招僧

同五日且雨且晴 在二神島 上山脈望■■海上有大市小

市横島三崑屹立干海中其状如画

同六日雨 午後漁干海岸同鍛乗

同七日晴 在二神島 兒輩拾海螺相呼而遊同遊兒鎮鍛乗及豊次其兒  
藤男也

同八日晴在二神島早起艤舟朝飯罷乃上舟、柔櫓出島則北風微動拳帆  
海上無波而舟行甚順小舟無屋持傘、遮日半日不知熱、八時発島午着  
三津、乗鍛自如鎮則苦頭痛不得食、三人食二神氏所贈行厨而上陸

※鎮、鍛は兄、乗は碧梧桐（乗五郎）のこと

これによると碧梧桐は、父静溪と兄二人（鎮、鍛）とで明治21年8月3日から8日にかけて二神島を訪れている。

8月3日の5時ころに家を出て7時に三津浜港に着いている。「腕車（わんしゃ）」とあるので人力車も使ったのであろう。それから舟を40銭で雇い二神島に向かっている。二神島には午後1時半に到着している。三津浜を出た時間がはっきりしないが、4～5時間くらいではないだろうか。

翌日の8月4日は仙嶽翁や祖先の法要をしている。この「仙嶽翁」とは二神種章のことで、父静溪からみると曾祖父であり碧梧桐の高曾祖父になる。法名は「仙嶽院徳香梅司居士」という。8月5日には雨も上がり、島の尾根から東方の四国方面を眺めている様子が伺える。二神島東端海上に3つの島があることが分かる。東から「大市小市横島」と書かれているが、「小市島、中島（なかしま、中島本島ではない）、横島」が正しい。

滞在4日目の8月6日は、碧梧桐は兄の鍛と海岸で漁をしているようだが何をとっていたのかは定かでない。5日目の8月7日は、

サザエを採ったり、豊次の子藤男と遊んでいる。藤男は島の親類筋にあたる二神分家の子どもであるようだ。そして最後の6日目の8月8日、8時に島を離れている。

これで見ると、それなりの関係がなければ6日間も島に出向いて法要・墓参りをするとは考えにくいのではないだろうか。もう一つ気付くのは、前述した携帯用系図の末尾に、「右以上八種章翁之筆也以下八坤補之 明治二十一年五月十九日種村孫 河東坤謹書」とある。父静溪は明治21年5月19日付で系図に筆をしたためているようであるから、その年には少なくとも2回島を訪ねていることになる。

### ■法華寺と宝塔寺

携帯用の系図に書かれてあった碧梧桐の曾祖父末弥の廟所である法華寺を訪ねて、関係のある部分の過去帳を見せていただいた。「天保十一年正月十三日春恵院閑斎日遊居士河東権右衛門事平蔵父」とあった。末弥の別名は権之丞。ここでは権右衛門となっているが、同じ人物とみていいのではと思われる。平蔵は子の虎臣のことで碧梧桐の祖父にあたる。

住職によると末弥以降の虎臣（矯）、静溪（坤）、碧梧桐（秉五郎）の墓は、法華寺が手狭になったので宝塔寺（松山市朝日ヶ丘）に移したという。宝塔寺にある碧梧桐の祖父虎臣の墓石には「名前は矯通称は平蔵で松山の人 父は二神種章の子で河東家に養子で入った」ことなどが記されている。

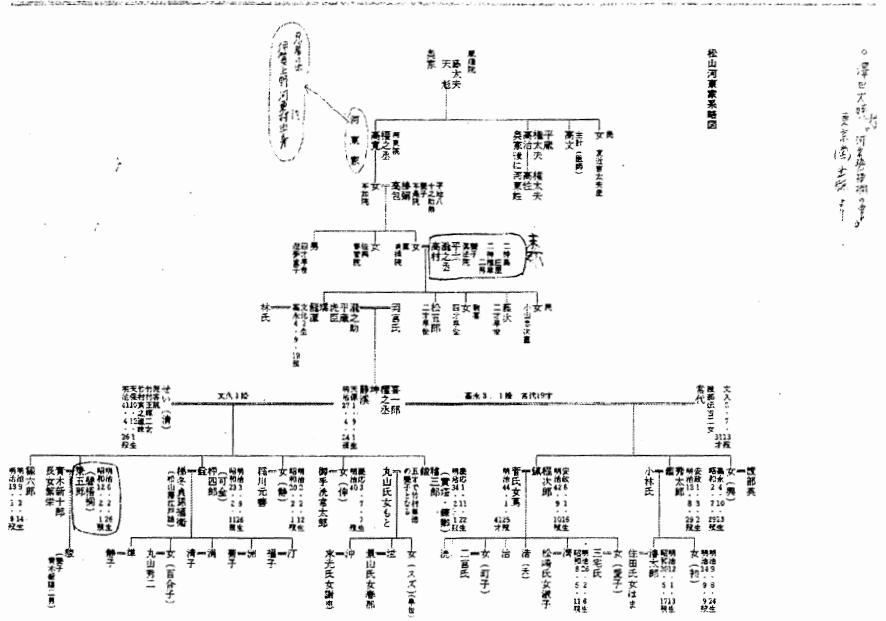
### ■河東家から二神家への書状

神奈川大学日本常民文化研究所が平成28年3月に刊行した「二神家文書目録（三）」の中に数点だが、河東家から二神島二神家にあてた書状がある。その中に、河東喜一郎から二神仲次郎あてのものがあり「・・祖父春恵院三十三回忌の法事をおこなった・・」とある。二神仲次郎は当時の二神島二神家の当主であり、喜一郎とは

静溪の別名であり、河東家に残る略系図に喜一郎と書かれている。  
 この書状の年代は逆算すると明治5年か6年だと考えられる。

■おわりに

現在までの資料により、二神島二神家と松山河東家との繋がりを紹介した。これらによって、碧梧桐のルーツは二神島にあることは間違いないだろう。ただ、どういう経緯で小さな二神島から松山の河東家に養子に入ることになったのか、それがいつのことなのか、詳しくは今のところ不明である。どこかに手がかりがあるに違いないのだが、これからも調査研究を続けていくことで解明につなげていきたい。



# 平田玉圃<sup>ぎょくほ</sup>と二神家・黒瀬家

編集部

## 見つかった平田玉圃の襖絵

平成31年(2019)1月30日、二神島から二神家本家に残されていた襖をはじめとする文書類が神奈川大学日本常民文化研究所(以下、常民研)に向けて運び出された。それから2ヵ月近く経った3月15日に常民研の関口氏から連絡があった。「実は二神家の襖絵に画かれているのが平田玉圃という画人のものらしいのです」という。

平田玉圃(新助)とは養母が平田玉蘊(ひらた ぎょくおん)といい、江戸時代末期に活躍した尾道出身の女流画家である。常民研で襖の下張り剥がしの講座があり、そこに平田玉蘊に詳しい広島県立歴史博物館の学芸員がちょうど参加していて分ったのである。学芸員によると、画の構図が平田玉蘊の画風と似通っていたことや落款印を見て判断をされたという。

いただいた平田玉圃の資料に、妻が「松山藩士、黒瀬彦九郎の娘弓枝」とあった(黒瀬家の系図や墓石では弓枝ではなくユミ)。これを見たときに「黒瀬?ひょっとして岩城島では?」と直感した。かつて二神家から岩城島の黒瀬家に婚姻や養子で入っていたことを思い出したからである。

## 二神家と黒瀬家

二神家のある二神島は、愛媛県松山市三津浜港の北西約16kmの海上にある。島を南北から見ると同じような円錐形をした180mほどの山が二つ望める。この二つの山の形状から頂上を神と崇め「二神(二上)」と名付けられたのではないだろうか。東西に細長く周囲が約8km、面積は僅かに2平方km、人口100人ほどの小さな島である。島の西方は山口県に接し、周防大島は5kmのところにある。

歴史的には、鎌倉時代後期から室町時代にかけて長門国豊田郷の

豊田氏に分かれが島に来て二神氏を名乗ったとされている。鎌倉時代末期における防州・長州には三大豪族と呼ばれた大内氏・厚東氏・豊田氏が互いに勢力を競っていたといわれる。豊田氏は平安時代に京都の藤原道隆（道長の兄）から4代目の藤原長房が長門の豊田郷に赴任し、その子輔長が初代豊田氏になったという。

第14代種秀に子がなく養子種世を迎えた後に実子種家が生まれた。種秀の没後に家督相続問題があり、種家が伊予の二神島に移ったとされる。二神一族は河野氏に仕えて重要な位置にあったと思われるが、河野氏の衰退などにより周辺地域に四散していった。

それから数百年の後、明治13年(1880)に二神島二神家から彌三郎(種秀)が岩城島の黒瀬家(分家の中三原屋)へ20歳ころ養子に入っている。彌三郎は万延元年(1860)生まれ。戸籍によると実父は二神英左衛門(種式)、実母はリツ。長兄・隼太郎(隼人)は広島県安芸郡瀬戸島丸石家へ養子、次兄・仲次郎(種美)は、二神島内で漁業組合設立や地域自治などに尽力し、弟・団四郎(種倫)は当時の神和村村長などを務めている。ほかに姉と妹がいる。



養父は黒瀬専次郎、養母はミヨで、後に娘のシヅと彌三郎は結婚している。養母は岩城島の戸籍では「二神新四郎(種五)四女」とあり、二神家にある「豊田藤原氏孫系図」には二神英左衛門(種式)の妹に「鶴代、岩城村黒瀬専五郎室」とある。二人とも父は二神新四郎(種五)であるから、名前に違いが見受けられるものの、彌三郎は先に岩城島の黒瀬家に嫁いだ叔母のところへ養子に入っているようだ。二神島では二神彌三郎だが岩城島に行ってから黒瀬彌と

称している。明治33年(1900)1月から40年(1907)2月まで第4代岩城村長を務めている。

後述するが、その彌三郎の娘が後に平田玉圃に繋がる黒瀬家へ嫁ぐことになるのであるが、伊予岩城島三原屋黒瀬家のことなどを記しておきたい。

黒瀬家のある岩城島は瀬戸内海のほぼ中央、愛媛県今治市の北東約25㎞にある。広くは芸予諸島、小さくは上島諸島に含まれる。行政区画は愛媛県越智郡上島町。岩城という名は、古代の部族名とか平安時代に岩清水八幡宮の所領になったとか諸説ある。島の中央の積善山は3千本に及ぶ桜の名所として知られ、30年以上前から「青いレモンの島」のキャッチフレーズで産業振興策に取り組んでいる。面積は8.9平方㎞、人口2000人。

「因島地方万年史」によると岩城島の黒瀬家は、伊予国宇和郡黒瀬発祥の藤原北家西園寺流とされている。この地は「東鑑」嘉禎2年(1235)2月22日の条に明らかで、橘家累代の所領を常盤井入道太政大臣家(西園寺実氏)の熱望によって家領になったという。19代実充のとき黒瀬城に居住して「黒瀬殿」と呼ばれた。嫡子公高に後嗣がなく実充の姪西姫と婚姻した公広が後を継いだ。ところが天正15年(1587)12月11日伊予大洲の地蔵ヶ嶽城で公広が戸田勝隆に討たれてしまった。その後、一族が三原城下に赴き小早川家の助けをうけていたが、江戸初期頃、再び伊予に帰って岩城島に住むようになったという。

### 平田玉圃と養母玉蘊と実母玉葆

平田玉圃(新助)は江戸時代後期に尾道で活躍した女流画家平田玉蘊の養子である。玉蘊(天明7年～安政2年、1787 - 1855)は尾道で木綿問屋を営んでいた福岡屋に生まれた。名は豊(とよ)と名づけられた。父平田五峯(新太郎)は絵を学んでいて、4歳下の妹(名は庸)も平田玉葆と名乗り女流画人として知られている。玉蘊は20代の頃、頼山陽と交際していたが決別して尾道に帰り、妹・



玉葆が三原の武家に嫁いで最初の子を養子として引き取ったのが玉圃である。



平田玉圃・ユミの墓石(岩島宝蔵寺)

その玉圃の妻が岩城島の黒瀬家(分家新三原屋)から嫁いだユミである。ユミの兄武一郎の孫友太郎に、前述した黒瀬彌(分家中三原屋)の長女サナエが嫁いでおり、玉圃は明治になって妻の実家のある岩城島で晩年を過ごしたと言われる。玉圃とユミの墓石は岩城島の宝蔵寺にある。玉圃は明治17年7月27日没、鳳玉院安誉眠山居士。ユミは明治39年5月22日没、鳳玉院恵馨大姉。黒瀬彌は玉圃が亡くなった3年後に岩城島に入っているので面識はなかっただろうが、妻のユミとは交流があったと思いたい。

玉圃の実母玉葆は三原(広島)の大原助左衛門に嫁し玉圃(新助)と哲四郎らを産んだ。墓は三原の寺院にあると思われるが定かでない。哲四郎は賀茂郡(広島)の岡田屋に養子に入っており、その岡田屋にも玉圃の作品が4点ある。そして、二神島の二神家の襖絵は6点が確認されている。

### 平田家、二神家、黒瀬家との関わり

江戸時代、二神島(二神村)と岩城島(岩城村)は共に松山領であった。また、二神家の文書によると寛文6年(1666)に岩城村孫右衛門と寄合網の網議定を取り交わしているため、このあたりから親交があったかもしれない。これを見ると、海を利用してお互いが行き来をしていたことが伺える。平田家は尾道で木綿問屋を営み、黒瀬家は岩城島で三原屋商店を営んでいた。二神島の二神家は江戸時



## 二神寛治と南湖院

二神寛治曾孫 齊藤文嗣

### 1. はじめに

2018年1月14日日曜日はよく晴れて暖かった。思い切って東京は北の外れ赤羽の自宅から、湘南茅ヶ崎に出かけた。1ヵ月ほど前の産経新聞連載コラム「大人の散歩」に、「神奈川・茅ヶ崎 南湖院記念太陽の郷庭園」の紹介があり、気になっていたからだ。そこに並んで、3月末日までの期限で「高田畊安と南湖院～東洋一のサナトリウムと茅ヶ崎」という企画展が、「茅ヶ崎ゆかりの人物館」で開催しているという記事もあった。「人物館」での催しと南湖院の訪問が二つセットにできることに魅かれた。

じつはこの時より10年ほど前に大磯まで遠征して、松本順と二神寛治（この二人については後述する）の調査をしたことがあった。その帰りがけ時間があまったので、茅ヶ崎駅で降りて南湖院に立寄った。かなり広い敷地に、明治の香りがするしゃれた二階建てや平屋の白っぽいペンキ塗りの木造洋館が、放置されるようにして残っていた。すこし荒れてはいたが、その優雅なたたずまいが強く印象に残った。清潔感があって、懐かしい奥ゆかしい建物の姿が気に入った。敷地内に人影はまったくなく静かであった。私はカギのかかっていない室内にも遠慮なく入りこんで、かなりていねいに内部の様子を眺めまわしたりもした。日常使われている様子はなく、雑多なものが無造作に収納されていた。この無防備なノンキさにとっても驚いた。

### 2. 二神寛治と高田畊安

なぜ大磯の帰りがけに南湖院に立ち寄ることになったのか。また十年もたってなぜ再びこの地を訪ねることになったのか。このきっかけはずっと以前、東大医学部図書館で見つけた小さな文章にあった。『東京医事新誌』（以下医事新誌）昭和11年（1936）に掲載さ

れていたそれを、そっくりここに引用してみよう。表題は「二神寛治君の美德」、筆者は「南湖院長 医学博士 高田畊安」とある。(引用文中の旧字は新字体にあらためた。)



高田 畊安

私が二神寛治君と御交際を始めましたのは明治二十三年でありまして、私が東京帝国大学医科大学内科教室にベルツ博士助手たりし頃であります。而して時々二神君御発行の東京医事新誌に寄稿しました。(私の同級生であつて同大学外科教室佐藤三吉博士助手たりし岡田和一郎君は最も盛んに寄稿して居りました。)私と二神君との交情は終始一貫して、只に変らざりしのみならず、後年に至り極めて親密と成りました。

同君は実に温厚篤実の君子で居られました。晩年大磯に居住せられました。大正元年三月下旬より茅ヶ碕南湖院に入りて御療養相成り、経過良好にして七月御自宅に御帰りに成りましたが、病症再発して直に復入院せられしも、治効を奏するを得ず、同年十一月十一日遂に御逝去遊ばされました事は遺憾の至りであります。同君は御療養中秀麗なる富士山及附近の風景を病室より眺めて其の美妙を嘆賞せられました。又御遺言に由り東京医事新誌を当院医局へ永く御寄付被下、今日に至るも尚ほ其の事の実行せられてあります事は吾々一同の深く感謝し同君の美德に感激する所であります。希くは令子孫及良き東京医事新誌の上に天より御祝福常に豊かならんことを。

この文章には「南湖院 高田病院長之嘱 蘭疇」なる扁額(かなり大きなものと想像される)の写真が添えられており、高田自身の「此の写真は松本順先生の書であつて、二神君が予の希望に基づ

き、請い受け、贈られし所であります。」という付記がある。掲載された昭和 11 年 9 月 26 日付医事新誌は、発刊三千号記念誌であった。明治 10 年に太田雄寧が創刊していらいちょうど 60 年（1877～1936）を数えて達成された。ほぼ週一回、かなり勤勉に発行され続けたことになる。この高田の文章に登場する、医事新誌、松本順、二神寛治、岡田和一郎の関係を以下にひも解いてみよう。



正面から見た南湖院本館



松本順先生の書による扁額

医事新誌創刊者は太田雄寧である。雄寧は嘉永四年（1851）、徳川御三卿のひとつ清水家の奥医師太田宗貞の長男として生まれた。14 歳のときに、長崎での修行を終えて江戸に帰った将軍家侍医松本良順（のち順）の開いた家塾に入門する。松本順は当時 33 歳、幕府医学所（のちの東大医学部）の頭取（初代は緒方洪庵で順は二代目）でもあった。長崎出島のオランダ人医師ポンペ直伝で医術を学び、蘭方医として当代随一の実力と権力をかねそなえた師匠を雄寧は得たことになる。しかもかなりの寵愛を受けたようであり、戊

辰戦争では師に付き従った数人の弟子たちと江戸から脱出したが、下総での官軍との戦いで一行と離れ離れになる。松本順は会津戦争に加わり、雄寧は板橋宿での戦いで敗れたのち、江戸に帰り潜行する。

戦乱が収まって明治三年、松本順は早稲田に蘭疇舎という病院兼私塾を開設し、塾頭に雄寧を指名した。だが病院は一年で閉じられ、蘭疇舎だけが残った。順は兵部省に出仕し、まもなく陸軍軍医総監となる。雄寧はややあって明治五年、製薬化学の研究をこころぎして米国に渡る。明治七年四月に帰国し、松本順のすすめにしたがって愛媛県最初の西洋医学病院兼医学校の校長として松山に赴任する。この病院兼医学校で薬局員を務め、雄寧から最新の製薬化学を学んだひとりが、畊安の文章にある二神寛治であった。

翌八年四月、任期満了となって雄寧は帰京する。その雄寧を慕って上京した数人のなかに、岩井禎三や二神寛治がいた。二年後の明治十年、雄寧は師松本順や石黒忠憲の加勢鞭撻をえて、かねてよりの宿願であった医学ニュース『東京医事新誌』の発行にこぎつける。この創刊の年、西南戦争が勃発し刊行継続が危ぶまれた。だが戦争の収束とともに部数は急速に回復し、翌年は千部を超え旬刊、さらに週刊となる。本邦最初の医学ニュースのひとつとして軌道に乗ったのである。

明治十四年、残念なことに雄寧は急な病をえて他界する。そのご松本順が医事新誌の局長となり、岩井禎三が編集を担当する。一年後明治十六年、東大医別科を終えて病院勤務がはじまった岩井にかわって、二神寛治が局長となり社事いっさいを引き受けることとなる。このようにして寛治は医学雑誌の記事をさがしもとめて大学や病院をかけめぐるようになり、東大医学部で高田畊安や岡田和一郎と出会い友人となった。ちなみに畊安の文章にあるように、この二人は東大医学部の同級生であった。岡田は愛媛県の出身、寛治とは同郷のよしみで明治二十三年から二十七年にかけて、医事新誌の主筆のような地位で編集に協力している。この主筆の役目は森林太郎

(鷗外)の後任であり、当時東大医学部教授として忙殺されていたが、あえて世界の最新の医学ニュースを新誌に提供し続けた。たとえばコッホの発見した結核治療薬ツベルクリンに関する情報は、ほとんど同時的に岡田によって翻訳され抄訳されて新誌に掲載された。ツベルクリン研究もおこなっていた畊安も協力したにちがいない。

大正二年に二神寛治が他界し、医事新誌は太田恒麿（旧姓は曾田）が四代目の局長となり、昭和十一年には三千号を超えた。太田恒麿はかつての松本順の蘭疇舎塾生（寛治も同塾生）であった。恒麿は松本順に可愛がられ、またいささか強引な松本順の目論見によって雄寧の娘と結ばれることとなった人である。四代目で医事新誌は太田家のもとに帰ってきたともいえよう。

昭和十五年ころから戦時の物資統制が進んで紙類にも及び、新聞や雑誌の統合がおこなわれた。医事新誌も例外をまぬがれず、他誌と統合され誌名も変わる事となる。昭和二十五年になってようやく太田恒麿の親戚大島盛一によって、もとの『東京医事新誌』として復刊される。だが昭和三十五年、大島の他界にともなって廃刊にいたる。

南湖院は昭和二十年、畊安の他界にともなって海軍に全面的に接收され、廃院となっている。したがって二神と高田の親交の証として、東京医事新誌がいつごろまで南湖院に寄贈されていたのかはわからない。おそらくは昭和十五年の段階で途絶えていたものと推察される。また畊安が寛治を介して手にいれた松本順筆「南湖院」の扁額は、私の知るかぎりでは行方がわからない。



岡田和一郎

### 3. 東京医事新誌が結ぶ交友、師弟、家族

前項では高田畊安と二神寛治が、医事新誌の原稿のやりとりをとおして知り合い、20年余にわたって親交を深め、そして寛治の最期を畊安が南湖院で看取ったことにふれた。ここではむしろ医事新誌が縁で結ばれた人々の交友関係、師弟関係、家族関係を中心に、視点を変えて記述してみたい。内容はやや前項と重複するが、ご寛容いただきたい。

医事新誌の創刊者は太田雄寧であるから、ここからはじめよう。すでにのべたように太田は清水徳川の奥医師の家系であり、雄寧はその長男として生まれた。だから早くから医学教育を受けている。まず將軍家奥医師であり医学所の頭取であった松本順の家塾で蘭方の手ほどきを受け、ついで幕府医学所にはいる。医学所へは石黒忠恵に遅れて一年後（慶応2年、1865）に入学している。ちなみに石黒は雄寧が医事新誌の発行を相談した際に（明治8年か9年ころのことと思われる）、手許にある金銭をすべて彼に手渡したと自ら語っている。石黒は明治に入ってから軍医総監などもつとめて、医学会の重鎮となった。

江戸城開城、上野戦争の敗北とともに医学所も閉じられ、雄寧は松本順に付き従って会津にむかうが、一行とはぐれて江戸にもどる。松本順は会津戦争の負傷兵の治療にあたっていたが、藩主松平容保の懇請で決戦のはじまる直前に脱出している。仙台にたどりついて商船に乗ることができて、横浜までたどりつく。そこで新政府の役人に捕縛されて、本郷の加賀藩邸にて一年間の謹慎生活を余儀なくされている。だがこの間の新政府の扱いは、非常に丁寧なものであったという。

自由になった松本順は、蘭疇舎という病院兼医学校を早稲田馬場下に建設する。ちょうど現在の早稲田中学・高校があるあたりで、大隈重信に先んじてこの地にキャンパスをつくったことになる。長崎での日本初の西洋病院であった養生所の建設にかかわったことと、幕府医学所の頭取であった経験がここでそっくり生きたのだ。



塾長に弱冠 19 歳の雄寧を指名した。雄寧の才能と、順がよせる信頼の厚さに驚かされる。

ところが山縣有朋の説得にしたがって、順はわずか一年でこの病院を閉じてしまう。軍備の医療的な側面を整えてほしいと依頼されたのだ。規模の大きな依頼に応じるほかなかったのであろう。学校だけは蘭疇舎として存続し、施設はそのままだ松本邸として残り、大磯に隠居するまでここに住んだ。屋敷近くの高台に穴八幡なる「虫封じ」で知られた神社がいまもあるが、入り口の鳥居に松本順と名前が彫り込まれている。馬場下町住民のひとりとして順が寄贈したのであろう。のち順は初代陸軍軍医総監になっている。

いっぽう雄寧は一時軍医として政府に出仕するが、ほどなく私費でアメリカにわたる。化学、製薬学の研究で一年余在米し、帰国してまもなく愛媛県立松山医学校校長兼病院長となる。任期をおえた一年後、雄寧は東京に帰ることになるが、このとき雄寧を慕って上京したひとりに二神寛治がいた。明治八年（1875）のことであり、寛治は 23 歳になっていた。

ここで二神寛治の出自、経歴についてさかのぼって述べておこう。生まれは嘉永 2 年（1852）、現在の松山市余戸（ようご）、江戸中期享保いらいの余戸村里正の三男であった。系図をひもとくと、長男貞一郎が若死にし、次男の精一が七代目を継いだとある。九代目輝一郎が書き残しているのだが、精一は長崎のシーボルトのもとで学んでいたところを、兄の他界で呼び戻されて跡を継いだのだという。孫が書き残しているのだから、精一の長崎遊学は信じてよいと思うが、シーボルトに学んだかどうかについてはちょっと無理がある。というのも、シーボルトが日本に滞在したのは 2 度、1823 年～29 年、1859 年～62 年であり、一回目の在日期間には精一はまだ誕生しておらず、二回目の時は 10 歳過ぎでまだ幼なすぎる。そこで、長崎での師はポンペの跡を引き継いだボードウィンであるとする、当地滞在期間が 1862 年～66 年であり、精一が故郷に呼

び戻されたのは1866年の兄の死によってであり、このときは17歳でもう立派な青年になっていたからつじつまが合う。ちなみにボードウィンは、東京上野公園の開設提唱者として知られ、国立科学博物館の正面、広場を隔て彫像となって顕彰されている。

もうひとつここに興味深い余談を継ぎ足すことができる。余戸二神家の親戚のひとつに、伊豫灘町の宮内家がある。江戸初期に伊豫灘町を切り拓いた家だとされており、いわば現在の伊予市の始祖だという。この宮内からでた蘭方医に、越智仙心という人がいた。江戸に遊学していたときに箕作阮甫の門下にあったと記録されており、幕末の伊予では指折りの蘭方医であったとあっていいだろう。(じつは灘町にはいくつか宮内家があり、仙心が出たのはどの宮内であるのかまだ確定できていない。)仙心は眼科が専門で、ボードウィンがやはり眼科を得意としたことを耳にして1864年、ボードウィンに弟子入りする。すでに57歳になっていた仙心の二度目の長崎遊学であった。つまり同時期の精一の長崎遊学には、この親戚筋にあたる越智仙心の導きがあったものと考えうる。蛇足だが、精一はのちに灘町の宮内本家、小三郎の娘ヒサと従兄妹結婚している。

またさらに精一の弟寛治は16歳で京都に遊学し、越智仙心の指導を受けている。明治元年頃のことである。その後寛治は大阪に出て英語をまなび、明治七年創立の愛媛県立松山医学校兼病院にかかわり、病院薬局員でもあった。この寛治の遊学パターンは兄精一が果たせなかった夢を、弟寛治が引き継いだものと考えていいだろう。

ここで話を東京に帰ったのちの太田雄寧と、彼を慕って上京した二神寛治にもどしたい。寛治の終生の友人となる同僚岩井禎三も雄寧に同行していた。寛治と禎三は明治八年創設の東京医学校(のちの東大医学部)に併設された「通学生教場」(のちの「別課医学」、通称「別科」)に入ることが主たる目的であった。「別科」は東京医

学校におけるドイツ語中心で学ぶ予科2年本科5年計7年とは別に  
もうけられた課程であった。7年間の学習が年齢的にも経済的にも  
厳しい人たちのための、2、3年で終了できる日本語中心のいわば  
速習コースであった。つまり当時は西洋医学の医師不足が深刻で、  
いっぽう寛治や禎三のような志のある医師志望の若者がたくさんい  
たのであろう。

ふたりは雄寧の塾に所属して別科に通学し、書生のようにして雄  
寧の仕事の手伝いをしていたものと思われる。雄寧はアメリカで学  
んだ薬学の知識を生かして、翻訳に余念がなかったという。いっぽ  
うで世界の医学情報の共有を志し、週刊医事新聞の刊行を企画して  
いた。こうして明治10年に誕生したのが『東京医事新誌』であった。  
松本順、石黒忠憲、福地桜痴といった人たちが背後からささえてい  
た。だが発刊四年にして雄寧は腎臓を病んで急死する。おそらく過  
労によるものであったろう。

すぐに続刊の体制が整えられる。まず雄寧の恩師である松本順が  
局長となり、松山から従ってきて別科を了えた岩井禎三が東大病院  
に勤務のかたわら手伝うことになる。一年後には禎三は岩手県立医  
学校に勤務がきまって、今度は二神寛治が局主となりいっさいの編  
集業務を引き受けることとなる。このことをきっかけに、寛治は別  
科の継続を断念したものと思われる。明治16年(1883)のことであ  
った。

ところで寛治が引き受けたのは局主の業務だけではない。残され  
た雄寧の妻八重と一人娘雄(たけ)もまると家族としてむかえた  
のであった。ただし娘の雄は太田姓のままであった。雄寧は医家と  
して由緒ある太田家の当主であったから、雄にはいずれは太田の嗣  
子として夫を迎えることにしたのだろう。二年後、寛治と八重との  
あいだに娘が誕生し種(たね)と名付けられた。

種が誕生して四年後、寛治は松山市余戸の本家である兄二神精一  
の次男豊を養嗣子として迎え入れている。豊は明治20年、11歳で  
上京し神田淡路町にあった共立学校に入学している。この共立学校

は現在の開成中学・高校の前身である。すでに受験予備校として全国にあまねく知られていた。伊予の出身者としては秋山真之、正岡子規などもこの共立学校で学んでいたから豊もこの流れを受けて入学したに相違ない。のちに東大医学部にとどこおりなく進んでいるのだから、たいへんな秀才ぶりをすでに発揮していたものと考えうる。精一には三男として俊平、さらに四男文太がいたので、豊を寛治にあずけるようにして養嗣子としたのではあるまいか。ちなみに豊が共立学校の生徒であった事実は、開成学園校史資料室に残されたいくつかの文書に明記されている。

のちに豊は、仙台の第二高校にすすんでいる。しかし二年次で山口高校に移っている。これはもちろん故郷の松山に近い学校に移ったのであろう。きっと仙台の寒さにも閉口したのだ。ということは、寛治の養嗣子になりながら、実生活では精一の実子として扱われ、過ごしていたにちがいない。ただ江戸期の風習が色濃く残っていた時代である。寛治には八重とのあいだに5歳になる種という娘がいたから、13歳の豊と5歳の種とは、許嫁の関係として将来が思い描かれていたのではなかったろうか。この推測の根拠については、またすこしあとで触れることができるだろう。

#### 4. 医事新誌の継承をめぐる

寛治が大正2年(1913)に南湖院で没するまでの30年間、寛治の采配によって医事新誌は継続した。さらなるこの継続は太田恒麿が局主となって、昭和11年(1936)には3,000号にいたる。寛治が没した大正2年(1913)の時点では、恒麿はすでに眼科医として成功しており、いくつかの病院を経営していた。周囲から医事新誌の経営を迫られて、かなり困惑し抵抗したらしい。経営権を高額で買うという人物もいて、その話にほとんど乗りかけたという話も残っている。恒麿の困惑の背後には次のような宿縁がからんでいた。

まず恒麿（旧姓は曾田）は明治15年（1882）、16歳で故郷福島を出て上京、松本順の蘭疇舎に入り医師を志す。ちょうどそのころに二神寛治も入塾している。恒麿はのち済生学舎（長谷川泰がひらいた私立の医学校）を卒業し、開業試験にも合格していた。明治26年（1893）には、松本順が仲立ちとなって太田雄寧が残した一人娘太田雄（たけ）と結婚し、曾田を捨てて太田姓を名乗るようになる。雄は父雄寧亡きあとも、太田姓を維持していたが、父雄寧が他界した後は母八重が二神寛治と結婚し、太田雄のまま寛治の娘として育てられていたのだ。つまり医事新誌の創設者が太田雄寧、二代目局主が松本順、三代目が二神寛治である。恒麿からすると、妻の実父が新誌を創始し、二代目が蘭疇舎恩師である松本順、この二代目には結婚の仲立ちをしてもらい、三代目寛治は義理の父であり、寛治の妻となった旧姓太田八重は妻雄の母にあたる。いわばがんじがらめの宿縁である。

寛治とともに松山を出て雄寧の塾生となり、別科に通いつつ、書生のようにして雄寧の医事新誌発刊に力添えしてきた岩井禎三は、親友二神寛治の葬儀に於いて弔辞を述べ、涙ながらに恒麿が太田の主であるからには医事新誌を引き受けることが道理であると訴えたという。けっきょく恒麿の抵抗は無駄であった。これはすべて太田雄寧を愛してやまなかった松本順の深謀ともいえる筋書きと配慮によっている。

話は前後し重複しながらすすむのだが、二神寛治が医事新誌局主となり太田雄寧の残された妻子、八重と雄と家族を営むことになった、というところまでいったん戻ろう。八重は雄寧とは15歳で結婚してすぐに雄を生んだから、寛治の妻となったときにはまだ19歳であった。寛治は31歳になっていた。二年後八重は21歳になって種を産む。すこし歳のはなれた雄の妹が誕生したのだ。そしてこの四年後に、寛治の兄精一の次男豊（13歳）が寛治・八重夫婦の養嗣子として迎え入れられている。この縁組について理由を挙げる

とすれば、先に書いた豊の父精一と寛治の果たせなかった医学への夢がこめられていること、引き受けた寛治には松本順、石黒忠憲、岡田和一郎、高田畊安をはじめとする当時の医学界の重鎮に分厚い人脈があったこと。また八重が続けて雄と種、つまり女兒を産んで、そのあと男児ができなかったことなどなど。八重は豊の養子縁組の四年後に、続く子を得られないまま他界している。29歳の若さであった。

八重が他界して一年後に、寛治は故郷の松山から後添え愛子を迎えている。愛子の戸籍名は「ヤエ」となっているが、前妻の呼称とまぎらわしいので愛子と呼ぶことにしたらしい。駒込吉祥寺にある二神寛治家の墓碑にも「愛子」と刻まれている。おなじこの年に、17歳になった雄が曾田恒麿（29歳）と結婚している。恒麿が太田姓になったことは、すでに述べた。このころ松本順が還暦を越えて、大磯に隠居している。寛治も師に付き添うようにして、大磯に別宅をかまえている。

愛子は明治26年33歳で寛治の妻となっているが、4年後37歳で恭次を産み、さらに2年後に秀子を産んでいる。恭次は長じて第八高等学校から名古屋大医学部に進んで名古屋市立病院に勤め、秀子は東京府立第一高女を出て裁判官杉本晋と結婚している。ところで養嗣子豊は、恭次が生まれたころ明治31年に、山口高校をおえて東大医学部に進学している。続けて秀子も誕生している。つまり豊は東京で暮らすことにはなったが、子育てに忙しい寛治の家庭に同居していたと考えることは想像しがたい。寛治の家族は京橋区南小田原町で暮らしていた。豊と種は本郷近くで、やっと二人で暮らし始めて、かつての親の取り決めた養子縁組を、現実の家庭として実現したのではあるまいか。

だが残念なことに、豊は結核におかされていた。医学部の卒業とその後の勤務病院も決まりながら、卒業式の当日に他界している。明治36年、28歳であった。寛治は51歳、大磯の別宅で彼を看取っている。また枕頭で豊の看護をしたのは種であったに相違ない。こ

の豊の死をめぐるのは当時の「中外医事新誌」が、卒業したての若い医者を追悼する記事としては破格と思われる特集を組んでいる。あらまは別稿で紹介したから、興味のある方はそちらをご覧ください。（『海の民ふたがみ』第10号,2007.）

ところで豊が他界する四年前にはすでに南湖院は設立されていた。南湖院がある茅ヶ崎と、豊が闘病していた大磯との間は、10キロ足らずの距離である。東海道線はすでに開設されていた。豊の治療には入院や往診をふくめて、高田研安がふかくかかわっていたことに疑いはない。豊の父寛治と研安とはすでに親交があった。また豊は研安にとっては東大医学部の後輩にあたる。実習などで師弟関係にあった可能性もある。豊の葬儀は明治36年7月11日、駒込吉祥寺でおこなわれ同地に埋葬された。

豊と種との婚姻関係は、東京大空襲で戸籍が失われていて確認ができない。だから筆者の推測にすぎない。ただこのあとの種の生きた後ろ姿は、輪郭だけではあるがはっきりと描くことができる。明治44年（1911）種と桑田志一との婚姻届けが、渋谷区役所に提出されている。桑田志一は明治12年（1879）、深川萬年橋で種痘術を得意とした小児科医師、桑田己一郎・多以の長男として生まれた。萬年橋の医院は明治32年の父己一郎の死でもって閉じられ、残された家族は赤坂に転居している。だから志一はこの赤坂の住まいから、東京慈恵医院医学専門学校にかよったのであろう。あるいは志一の医学校通学のことを考えて、赤坂に居をうつしたのか。志一は明治36年に医学校を卒業し、病院研修も終えた2年後に東京渋谷青山北町で桑田医院を開業している。よく知られた幕末の蘭方医桑田立齋の種痘術を継承した三代目の医院となった。場所は現在の青山学院とは青山通りを挟んで、斜め向かいの位置にあたる。

婚姻届けは明治44年ではあったが、種は明治40年7月に23歳で男児を、明治42年には二人目の男児を、明治44年には女児をと、計三人の子どもを産んでいる。三人目の女児の出産の翌日に婚姻届

けが提出されている。ただし最初の男児は6カ月で、三人目の女兒は8歳で他界している。だから青山桑田医院を開業してまもなく、志一と種は事実上夫婦として暮らしていたものと考えられる。すでに明治31年(1898)に届出婚主義による民法改正があったにもかかわらず、婚姻届けが四年も遅れた理由はよくわからない。民法の規定が生活者にまでは行き渡らなかっただけのようなのである。ただ種の父親寛治は、幕末から名高かった蘭方医の家系である桑田志一に娘を嫁がせたことには満足であったと推察される。後に名古屋大学にはいって医学を志すことになる寛治の息子恭次は、まだ旧制中学の生徒に過ぎなかった。

種はさらに大正4年に女兒を、一年後大正五年にもうひとり女兒を産んでいる。二人を失って、一男二女の母親となった。

ところで種と太田雄とは、母はおなじ八重で父親違いの姉妹である。種と秀子とは父親は寛治で母親違いの姉妹となる。彼女たちは父母が異なってはいるものの、仲の良い三姉妹であったようである。とくに種と雄とは渋谷稻荷橋と青山、せいぜい徒歩10分の距離にあって、家族同士でさかんに行き来し、秀子は生け花の先生として雄のもとにしばしば出かけた、という話が伝わっている。

## 5. 結び——わが家の南湖院史——

「わが家の南湖院史」とは、いささか回りくどい表現である。何のことはない「わが家の結核史」と言おうとしているのだ。最初に書いたように、この小さな文章を書こうとしたきっかけは、茅ヶ崎市が企画した展示「高田畊安と南湖院」に出かけたことにある。展示物のなかに、松本順が畊安に贈った扁額「南湖院」があれば私は観たかったのだ。しかしこの扁額を見つけることはできなかった。

また寛治と豊が結核に侵されて、畊安を中心とする南湖院の医師たちの看取りで逝ったことも知っていたので、写真でもいいから往時の建物の全容を確かめたかった。その時にふと、私が10歳にな



ろうとするときに、36歳で他界した母みやの結核は、豊から寛治、さらに種を経てのものではなかったか、と思い至ったのだ。つまり「わが家の南湖院史」という言葉がこのとき私の頭に浮かんだ。

寛治の養嗣子豊と許嫁関係にあった種は、豊の看護と看取りのあと、桑田に嫁いで5人の子どもを生み、うち2人を亡くし、3人を育てた。そのうちの長女が私の母みやであった。種は昭和2年(1927)に43歳で他界している。病名は不明であるが、おそらく結核であったろう。豊と父寛治からもらったのだと推測する。3年後に今度は、母みやは51歳の父親志一を亡くしている。志一も結核ではなかったろうか。この推測を裏付けるように、東京府立第八高女に通っていた母みやは、母親に続けて父親もなくして精神的にも危機状態にもあったのであろう。周囲の計らいで女学校を休み、遠縁の親戚のあった上総一宮に転地療養している。この療養のおかげですっかり元気になったと伝えられているが、ある日預かり先の主人がときどきみや宛に送られてくる封書に不審をもって確かめたところ、たちまち激怒して母をただちに東京に送り返してしまったのだという。当時は結核に効くとされていた薬物が、気遣っていた親族から定期的に送られてきていたのだ。みやの約2年の転地療養が、母種と父志一経由の結核に起因するものであろうと推測するゆえんである。

わが母みやは、そのご結婚し子どもを5人もうけた。2人に他界され3人がのこった。私は昭和17年生まれの長男であった。戦時から戦後のかけてのことである。食糧事情が悪く、夫は出征していた。夫が無事に帰国したあと、もう一人に恵まれたが出産直後にサナトリウムに入院



左から夫人愛子、三女秀子、長女雄、次女種



## 老人会

奈良市 二神 守

先日、毎日新聞の万能川柳欄に「ネーミング 他にないのか 老人会」という秀作が載っていました。奈良市では地域の殆どが「〇〇万年青年クラブ」と呼称していますが、所詮、老人会の印象をぬぐい切れません。

さて、私の住んでいる地区でも以前から「万年青年クラブ」では芸が無いと言われてきました。現在は「秋篠台 山椒の会」とネーミングし、数多くの企画を実行し活動しています。「山椒の会」とネーミングされた由来はさきの川柳のごとく、老人会というイメージがずっと続いていたので、何とかして会員を増やすには、心機一転会の名称を変えたらと言うことでした。

役員会には新進気鋭の女性会員が加わって意見を出し合い討議を重ねた結果「秋篠台 山椒の会」ということになりました。山椒は小粒でもピリリと辛いという諺もあり、華やかさはないが小さくてもパンチのある味わい深いところが会の雰囲気にも合っていると全員一致で決まりました。

最近、少子高齢化が急速に進み、どんな組織でも減少・減退が問題となっています。私の住む地域でも、50年前に開発され分譲されたときは壮・青年であった世帯主が80～90歳代となり、2代目、3代目の時代となってきました。

幸い私たちの「万年青年クラブ」は「秋篠台 山椒の会」とネーミングのお蔭かどうか、現在も高齢者を含む50人余りの会員が精力的に活動を続けています。

ネーミングも結構、大事なこともかもしれませんね。

## 令和になり、昭和・平成二世代之前のこと

理事 二神 久蔵

「保育園落ちた、日本死ね。」最近忘れていた言葉が然る全国紙の社説に出た。【阪神支局事件 危うい「反日」の氾濫】という主題だ。社説を読んでも無博碩学の私には意味が分かりません。何で昭和・平成二世代之前、32年前前前が「令和天皇即位の礼」の翌日、祝賀ムードの多い中、こんなこじつけ社説を出すなんて思えない。

阪神支局事件は事実ですが、何で「保育園落ちた、日本死ね。」と「阪神支局事件」「反日」を結びつけるのか。言論の自由、弾圧を言いたかったと思いたいが、内容は魑魅魍魎で分かりません。「阪神支局事件」「反日」は理解できるが、「保育園落ちた、日本死ね。」は理解できない。テロ、破壊行為ではないか。自社の阪神支局襲撃事件は赤報隊と名乗る者のテロ行為と毎年非難を繰り返す「保育園落ちた、日本死ね。」はテロではなく正当化して反日に結び付くのか。阪神支局事件が言論の圧迫であれば、「保育園落ちた、日本死ね。」の破壊行為も言論の自由なのか。「保育園落ちた、日本死ね。」の破壊行為が言論の自由なら阪神支局襲撃も赤報隊の行為声明も言論の自由行為で正当のはず。破壊行為でも一方が正当で他方は正当でないとは魑魅魍魎で分からない。この全国紙は私などの読むべき新聞ではなく博碩学に長けた方々向けの読者を対象者にしているのか疑問を持つ私が悪いのか。

「保育園落ちなかつたら、日本は死ななくて良い」のですか。そもそも「日本死ね」とはどういうことでしょうか。「日本沈没」(小松左京著)のごとく地殻変動で日本が沈没することなのか。それとも他国の支配下になれということでしょうか。日本が死んだら本人は楽しいかも知れないが、ほかの多くの人々は困るのではないか。自分ひとりだけが幸せで他人は日本が無くなれば困るし、不幸になっても満足なのではないでしょうか。本人は日本が無くなれば今後どうなさるのか。他国か無人島へ移られて希望・欲望を満たされるのです

か。

世界の隅々までは知らないが、公立の三年保育に全員入れる国を挙げてほしい。物事には限りがあり、保育園・学校・会社・宝くじの当たり本数・列車の指定券、船舶や航空機など交通機関の定員数がある。その定員に入れなかったら交通機関などを破壊しても良いのか。人はそれぞれに定員漏れ・希望の学校や会社・乗り物に乗れずに挫折感や諦めを味わって生活している。自分だけが幸せで他人、他国のことは考えないのか。住民の集まりで貴方達は自宅周辺に公立の保育園をもっと作れと言うと、他の住民が「保育園はいらぬ、ほかの施設はを造れ」と保育園設立に反対したら、私は正しい貴方達は死ねと叫ぶのですか。公立の保育園等公立施設は国民の血税で造られ他者の別の要望もある。人々、国々は自分と異なる考え方、国情も異なる風習の集団で生きている。即ち異なる事柄からなる中で公平共存の多くの人々は成り立っている。その公平共存をめぐる対立するしながら論争することは、正しい社会が成り立つあり方だと思う。対立を認め合い、共存ができるよう物事を決めるルールを尊重すべきだ。

「自宅近くの三年保育園の定員に漏れた、日本は死ね、私の考えは正しい、国が悪い」と排除する考え方は破壊行為だ。保育園を自宅近くに求めるなら、他者の意見も聞き公正な競争ルールに従うべきだ。異なる意見の他者との共存を考えないと、どの国どの集団でも生活できない。家族も小さな集団、自分とは意見が違う他者を無視、排除するなら無人島で好きなように生活するしかない。

私も「令和」の祝賀ムードに包まれているときに、然る全国紙のこじつけ社説（私だけの思い）を読んで思いのままに雑文を書き、社説が分からない凡凡人ということで失礼させていただきます。

## なんとか存続している港山二神氏

理事 二神 康郎

二神系譜研究会の会員が現在何人いるのか、会員数は増加傾向か、あるいは減少傾向にあるのかについてはよく知らない。しかし、察するに会員の加齢による引退が進み減少傾向にあるのではないだろうか。もしそうなら会費収入も減り、先行きが危ぶまれることから、今後どうやって存続を図るかが課題となってくるはずだ。

私達は多々ある二神グループの中でも港山二神氏を名乗らせていただいております、小生は初代から数えて5代目に当たる。そのため私は港山二神氏の安泰と伸長、それに家族・係累の系譜研究会への加入を願ってはいるが、はかばかしい成果は上がっていない。

港山二神氏の歴史をたどると今から約220年前に二神島で二神本家から分家して豊田氏を名乗り、約120年前に豊田渉系譜研究会常任理事の先祖に当たるその豊田氏から更に分家して二神姓に戻り二神島を出て松山市の外港三津浜の対岸に当たる港山に住み着いた。その当人を我々は第一世二神茂七と呼んでいる。その長男の名も同じ茂七であるためだ。

港山二神氏は発足以来120年を超えるが増殖力に欠け、現在二神姓を名乗っている家族は6所帯しかない。係累にはどういう訳か女と夭折者が多く、養子に出る男も多かった。私自身も一人息子だ。そのため小生の父親長憲の子孫で本家系に当たる2所帯と、その弟で分家の貞治の子孫4所帯の合わせて6所帯だけが港山二神氏グループに所属している。

三津浜信用金庫の理事長を長く務めた私の父親二神長憲は晩年私の子供が女ばかり3人なのを見て「跡継ぎはなくてもいいよ。」と言い残した。家系の断絶について私に過度に心配させないよう気を使ったのであろう。しかし私は何とか跡継ぎを作りたく次女の連れ合いに話を持ち掛けた。しかし彼の子供達健康上の問題もあって事はかばかしく進まなかった。

その後、三女が恋愛して結婚することとなった。手続きを進めていくうちに結婚後は二神姓を名乗ることにしたというので私は大いに驚いた。先方は3人兄弟ながら長男であったからだ。私は相手の家族に心から感謝した。結婚式に出てみると、いつ持ち出したのか会場の目立つところに我が家の系図が飾られている。私から三女に跡継ぎの話をしたことは全くなかったが、三女は系図まである家系を維持したくて相手を説得したのかもしれない。

この系図には、二神島で生活していた二神本家の嫡男である故二神司郎氏（画号名：司朗）の叔父にあたる二神仲次郎（種美）氏が、二神本家の系図を書き写して二世茂七に与えたものだとの注釈書が付いている。書体は素晴らしい達筆で筆者の教養が偲ばれるが、なぜ初代の一世茂七ではなく二世茂七に贈呈されたのかは調査課題だ。

三女には長男も生まれ、この5月1日の改元の初日に9歳の誕生日を迎えた。このような訳で当面、私の家系についての心配事はなくなった。私にはさしたる遺産もないが、相続の対象候補の一人として、二神姓を継いでくれた三女の連れ合いを考慮したいと思っている。



拙宅で開いた「2018年のクリスマス祝会」に集まった港山二神氏の本家系家族  
(前列左から3人目が筆者)

# 宏介さんの2019年を振り返って

関西支部 二神宏介

はじめに

事務局長の復活よかったですね！！

私は現在78歳ですが二神会が長らく休んでいましたので過去を振り返りながら、ブツクサ言ってみたくと思います。新元号「令和」が始まっている頃に「海の民ふたがみ」が記念すべき発刊になります。「海の民ふたがみ」令和記念号ですね！！私は昭和15年生まれで昭和の思い出は空襲で2度焼け出され、歳を取るほど戦争体験や昔の事ばかり思い出されます。昭和天皇が崩御された世相も暗いものでした。平成時代になり平成天皇、皇后の優しいお姿に平和になったと実感をしました。ただ平成は天災が続き、昔から怖いものは、「地震、雷、火事、〇〇〇」でしたが、本当に北は北海道から南は九州・四国は天災で大変だったと思います。私の大厄は78歳になってからいっぺんに押し寄せてきました。娘宅は「高槻地震」で屋根が崩れ、直後に大型台風と家じゅう浸水し、実姉は義弟を送り、友人も3名亡くなりました。その直後、私が急性心不全で救急車で運ばれ人生もう済んだとあきらめました。35日間の入院で命からがら帰還でき、ほんま、「三隣亡」「天中殺」全部真っ黒の気持ちでした。今は終活の真最中です。この原稿を書くに当たり古いメモが出てきましたので当時の事も書き留めます。古い話ですがご辛抱の程！！



## 関西支部会の動向

2017年7月9日俊一会長を招いて関西支部会を開催しました。

支部会報告は次の通りです

### 二神系譜研究会関西支部会&懇親会 結果報告

日時 平成29年7月9日 11時50分から14時10分



場所 大阪ヒルトンホテル地下2階 食事処「たちばな」  
出席者 二神俊一、二神倫一郎、二神守 二神敏郎、二神喜久雄  
二神敬志 二神宏介（敬称略）

## 議題

- (1) 平成 28 年度総会概要について二神俊一会長から報告  
特に平成 27 年 12 月 9 日の『第 21 回日本常民文化研究講座』  
について説明し参加を要請
- (2) 宏介事務局より「愛媛県人会誌『近畿と伊予』」に名刺広告を  
掲載した旨報告
- (3) 広島の中岡等氏から DVD（種昭氏の歌収録）が送られてき  
た分を希望者にコピーして配布
- (4) 宏介事務局より関西支部会費の余剰金の一部（3 万円）を  
本部に寄付したいとの提案あり、出席者全員賛成し、  
後日 3 万円振り込むことに決定した。
- (5) 守さんから、関西支部としては何も（本部を）お手伝いはで  
きないが、日々の活動・総会の資料などは素晴らしくよくでき  
ていると本部をほめていました
- (6) 芦屋在住の中岡等氏が県人会等に出席して「海の民」に興味  
があることから、中岡等さんにコンタクトをとって「海の民」を  
お届けしたり、入会してもらいたい

（平成 12 年頃、二神俊一会長が伊予銀行大阪北支店長時代、  
㈱中岡工務店を訪問し、中岡社長にも面談し二神島、中島の話  
などをした経緯を説明。二神島の安養寺に中岡等氏が 100 万円  
寄付した旨の石塔があるなどの話をする）

（その後、倫一郎氏から電話あり、倫一郎氏の友達（村上さん）  
を通じて中岡等氏に面談に行くので「海の民」16 号、17 号を  
3 冊づつ倫一郎さんへ送って欲しいということになった）

倫一郎さんから、「中岡等氏は、二神島を活性化させるプロジェ  
クトを立ち上げているらしいので、なおさら、二神系譜研究会に関  
心をもってくれると思う」と言っていました。

その他出た意見

(1) 喜久雄さんから（会議の開始前に）「宅並二神衆墓石群整備事業」の寄進者銘板に自分の名前が見当たらないので調べて欲しい旨要請あり、英臣事務局長へ TEL して調査依頼。

(2) その他

この後は支部活動も休んでいます。2019年5月の系譜研究会総会後に支部会開催を考えています。尚、県人会誌「畿と伊予」名刺広告の協賛は二神会中断の為、断っています。

## 76 歳の手習い

友人の勧めで Facebook を始めました

NHK テレビの話題から PC からスマホの時代へ

NHK テレビによると、PC からスマホの時代へとなりつつあり、最近は PC 離れが進んでいるそうですネ  
私もウィンドウズ7の調子が悪くなってヘルプを頼んだんですが、もうサービス期限切れでヘルプは有料との事。調べ物はスマホに、PCはワード・エクセルで十分なので、PCを買い替える意欲もなく、歳も歳ですのでPC離れになりそうです。

若い子がどこでもスマホを使い、電車内では10人中8名がスマホ！スマホ！！年寄りには、うっとおしいかぎりですが、Facebookを始めてみて新しい発見もありました。友達の友達は皆友達!!的に毎日知りあいかも?の表示がされます。ためしに「二神」で検索したところ結構二神姓の方が多く、アイデアとしてFacebookに全国の二神さん集まれ!!を投稿したらおもしろいかな!何人か関心を持ってくれる人があれば楽しみでんな!

子供の頃は愛犬 {ポチ} を連れて散歩、今は「スマホ」連れて散歩 電話、ライン、写真撮影、することがなければミュージック、ワンセグTV、インターネット、マップで旅を楽しむ終活の人生をエンジョイしています。

## 縦の巨木

二神 俊一

私の家の庭にモミの巨木があった。過去形なのは、昨年秋に伐採して現在はない。

ただし、現在も伐採した痕跡は残っている。

モミは縦と書き、常緑の針葉樹であり、有名なニューヨークのロックフェラー・センターのクリスマスツリーは縦の木が使われている。

本稿では、庭の縦の巨木伐採までの顛末を書いてみたい。

縦の巨木は、かれこれ10年以上も前に先端を切ってもらったことがあるのですが、その後大きくなりすぎて、すぐ横にある電柱の高さを遥かに超え、カラスが巣をつくり、鳥害の元になったり、高すぎて消毒もできないので油虫が発生したりして、もはや、素人の私には管理できない存在となってきていた。

いつ誰が植えたのか、聞くのを失念したが、多分祖母の時代だろうと推察すると樹齢は100年を超えることになり、まさに我が家の「神木」的な存在でした。ちなみに樹高17メートル、幹の直径65センチメートルで私には手に負えない状態でした。

そこで、毎年庭木の選定を依頼している「松山シルバー人材センター」の担当者に相談したところ、クレーンを使わないで人海戦術で伐採可能とのこと。早速見積もりをしてもらった。

夏から秋にかけて、剪定作業する人は多忙であり、加えて天候に左右されるため、作業人が5、6人が纏まって取り掛からないといけないそうで、日時の設定に時間を要した。

神木的存在の巨木なので、正式に「お祓い」をしてもらうことにして、久米の日尾八幡神社の三輪田宮司に連絡してお祓いのセレモニーをしてもらう段取りをつけ、シルバー人材の選定士のチーフの人にもお祓いに同席してもらった。

伐採の日程が決まってから、剪定の作業人の方が何度となく、来

宅しては、縦の木を見上げて、伐採手順のイメージトレーニングに励んでいたのには驚いた。

月曜日の朝一番に、作業人の同席のもと、三輪田宮司さんにより「お祓い」を受け（作業人が使用する命綱なども）いよいよ、火曜日の早朝から5人がかりで、伐採にとりかかった。

器用に枝を落としていってから、チェーンソーで上から切断して、ロープの滑車原理を利用して、重量のある幹を手際よく落としていき、待たせてあったトラックに載せて廃棄物処理場へ運んでいくなど、一連の流れ作業は見事で、水曜日の午前中にはほぼ完了していた。

その後、木曜日に他の庭の木の剪定をして、金曜日に後始末ということで、伐採した切り口に薬を注入して無事完了。かくして1週間のシルバー人材剪定週刊が終わった。

巨木がなくなって急に周辺が明るくなり、全く様子が変わってしまった。

後日談ですが、遠方から尋ねてきた知人に、あのモミの木を目印にして来ていたのになくったら、ちょっと分かりづらい、と。

2019/06/25



(庭の縦の巨木)



(日尾八幡神社三輪田宮司によるお祓い) (2018/11/26)



(縦の巨木伐採直後) (2018/11/28)

## 北海道からの訪問者

豊田 渉

人とのつながりは案外ひょんなことから始まるものだと思うことが最近あった。今年の2月ころ、北海道の芦別市に住まわれている方から松山市役所中島支所へ忽那諸島に関するパンフレットの請求があった。パンフレットをお送りしてから、お礼を兼ねての電話があり、4月に来県の予定で忽那諸島を回るといふ。私は、3月末で再雇用も終了してフリーになることが分っていたので「よろしかったら、私が案内をさせていただきますよ」と提案した。

よく聞いてみると芦別市に住むNさん(77歳)とKさん(70歳)。Nさんは全国の島を訪ねて30年、出かけた島は200ほどになるそうだ。きっかけはよくわからないけれども、「島を愛する人に悪い人はいない」と私は勝手に思った。KさんはNさんに感化され島旅歴9年。いつしか二人で島を訪ねるようになったのだという。お二人とも自営業でお米屋さんと文房具屋さんだった。

Nさんが、松山で最初の日に「サントリーバー露口」に行きたいという。「あそこは洲之内徹がよく通っていた」というのだ。洲之内徹は、松山生まれで美術エッセイスト、小説家、画廊主、画商で、「きまぐれ美術館」の筆者として名高い。実は、昭和62年6月にNさんが所属していた芦別市青年会議所が関わって、芦別市内で洲之内徹の展覧会を開いていた。その4ヵ月後に洲之内徹は他界するが、芦別市での展覧会が最後となった。洲之内徹の葬儀にも出席したというNさんの強い思いがあり是非とも、「サントリーバー露口」に行きたいということだったのである。

この露口さんは私も数十年来存じており、二神島にも何回か足を運んでいっている。ご主人のカメラの腕前はすばらしく、奥様は明るく元気な方である。お二人を含めて、二神司郎氏との縁があったのだろうか、松山ドレスメーカー女学院の村上寿子さん、彫刻家の森堯茂さん、道後温泉本館の額を作成した村田英鳳さんなど多くの

方々が二神島には芸術家関連の方々がよく来られていた。

今回、お二人は2日間で鹿島・二神島・津和地島・怒和島・釣島・中島・睦月島・野忽那島に加え、太山寺・円明寺を回った。私は二日間同行させていただき、中島の旅館に一泊した。8つの島を定期船で回る計画はNさんが立てたようだがまったく無駄がないのにびっくり。FAXで送っていただいた手書きの島めぐり案は素朴で温もりを感じた。島には最低でも1時間は滞在するのを基本にしているという。今までまったく縁のないお二人だったが、このつながりを大事にしたい。私もいつしか芦別市を訪ね、洲之内徹が展覧会をしたという場所を見てみたいものだ。



松山市の「サントリーバー露口」にて

## 編集後記

今回の第18号は難産で、かなり遅れて皆様にお届けすることになりお詫び申し上げます。遅れた関係で、平成から令和へと元号が変更されて初めての冊子となりました。

早々にご寄稿を頂きました方々、編集に携わって頂いた関係者の方に御礼申し上げます。

当会も今年で設立19年目となり、これまで数々の調査・活動に多くの関係者のご努力がなされてきたことに改めまして感謝申し上げます。

来年は創立20周年の節目を迎えますが、タイミングよく、令和2年（2020年）4月には従来から5年毎に開催される「豊田氏慰霊五年祭」が山口県下関市豊田町で行われる予定です。

このようにいろんな行事が予定されていますが、一方、限られた人財の中での活動になります。少しでも前に進めていく必要性を感じています。

引き続き当会のさらなる発展のために、関係者のみなさまのご協力・ご支援を頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

令和元年（2019年）6月30日  
会長 二神俊一



## 編集後記

前号の「海の民ふたがみ第17号」発行から、もたもたしていたら時代は平成から令和へ。思えば前号が平成最後の会報となり、この18号が令和最初の会報となってしまいました。遅くなったことをお詫びし、今後とも会員の皆様のご協力をお願いいたします。

今、二神系譜研究会発足当時のことからのことを思い出しています。結果的には会を立ち上げた中の一人に加えていただいたことを嬉しく思っています。小さい頃から文章を書くことはそう得意ではなかったのに、会報の作成に関わらせてもらっていいのかどうかと思うことしきりです。二神島の実家で片づけをしていると小・中学校時代の作文が少しですが残っていました。へたくそな字ですが自分が書いたのに読めない部分もありました。残された作文を読んでいるとその当時のことがよみがえってきます。

思えば良い時代に生まれ育ってきたのではないかと思います。決して豊かではなく、島という隔てられた中での生活でしたが、島の人たちに育てられたのだと思います。殆どの島人の顔を知っている小さな世界でしたが、みんなで笑って怒って泣いて楽しんでいました。子どもたちが悪いことをすると、叱り諭す役割のじいちゃん・ばあちゃんが居たような気がします。そんな中で物事の良い事や悪いこと、やっていいことややってはいけないことなどを教えてもらったように思います。そんな身近な？時代はもう望めない世の中になりつつあるようですが、ふるさとの思い出とともに私の心の中には生きています。これらの思いをこれからの人たちに十分伝えることはできないかもしれません。私たちの年代は、古き良き時代のことと高度情報化社会の時代の両方を目の当たりに見てきたといえるでしょう。

20年もつなげてきた会です。どうせなら精一杯のことをやって後悔？するほうがいいと私は思いますから。

(2019, 7 豊田)

二神系譜研究会  
「海の民ふたがみ」第18号

発行日 令和元年(2019年)7月31日

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 二神系譜研究会への連絡先 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

会長

二神 俊一 〒791-0243 松山市平井町 3020  
TEL・FAX：089-975-1650  
Email：shunichi@futagami.se

事務局、事務局長

二神 英臣 〒799-2469 松山市光洋台 7-34  
TEL・FAX：089-994-2542  
Email：ogawatakuwami@yahoo.co.jp

広報

二神 重則 〒791-0243 松山市平井町甲 2169-43  
TEL・FAX：089-976-5179  
Email：westengehen@tempo.ocn.ne.jp

冊子編集委員長

豊田 渉 〒791-1101 松山市久米窪田町 400-9  
TEL：089-970-6140  
Email：wakkun492@leo.e-catv.ne.jp

二神系譜研究会

URL：http://www.rootsfutagami.org/

編集・印刷

ネクサス愛媛 愛媛県松山市余戸中 2-9-2  
TEL：070-5514-2701  
Email：nxsehime@gmail.com  
URL：http://nxsehime.jp/

表紙の写真・・・常民文化研究講座パネルディスカッション 平成29年(2017)12月9日